

皇學館大学研究開発推進センター紀要 第九号  
令和五年三月一日発行（抜刷）

資料

吉田神道資料

—— 清原宣賢筆草稿本

『行事秘』

新 田 惠 三

## 吉田神道資料——清原宣賢筆草稿本『行事秘』

新 田 惠 三

## はじめに

皇學館大学研究開発推進センター神道研究所の部門別研究第一部門（神道思想）では、「神道・国学思想及びその周辺思想の調査研究」として、吉田神道、垂加神道、国学の思想、及びそれらの周辺を構成する儒教・道教・仏教などの外来思想について、専門領域ごとに分担しながら、総合的に調査研究が進められている。吉田神道の資料を紹介する本稿はこうした活動の一環である。

吉田神道（宗源神道、唯一神道）は、京都吉田神社の祠官吉田兼俱（一四三五―一五一二）によって創出された神道説であり、卜部氏が伝えてきた家業・家学に、中世の諸神道説、仏教、儒教、道教、陰陽道などを取り入れて形成されている。その成り立ちについては諸先学によって議論が重ねられてきており、応仁の乱によって社会が混乱したことが教説形成の契機となり、文明年間（一四六九―一四八七）には重要經典の述作や祭祀施設の整備が行われたとされている。当主は「神道長上」「神祇管領勾当長上」などを称し、天皇や公家・武家に古典の進講・講釈や行法の伝授などを行い、明治維新に至るまで各地の神社や神職にも多大な影響を与え続けた。

吉田神道は独自の事相（行法）を有しており、こうした事相についての研究は、石崎正雄氏<sup>(1)</sup>に始まり、出村勝明氏が本格的に取り組んできた<sup>(2)</sup>。しかしながらいまだ不明な部分も多く、次第や注釈書についても、主要なものは出村勝明氏の『吉田神道の基礎的研究』や『神道大系』卜部神道<sup>(3)</sup>（下）に所収・紹介がなされているが、未公開の資料も多いのが現状である。

本稿では、吉田神道の事相注釈書群の中でも重要な位置を占めると考えられる清原宣賢筆草稿本『行事秘』について紹介する。まずは書誌を確認しておこう。

## 書 誌

・所蔵・配架―天理大学附属天理図書館吉田文庫四二―四三四

・装訂・数量―折本一帖

・各紙の法量（単位は糎）

第一紙（一五・五×三四・二）、第二紙（一五・九×三八・四）、第三紙（一五・八×三八・五）、第四紙（一五・九×三八・五）、第五紙（一五・九×三八・六）、第六紙（一五・八×二九・五）、第七紙（一五・九×三七・五）、第八紙（一五・八×三七・〇）、第九紙（一六・〇×二七・四）、第一〇紙（一六・〇×三八・五）、第一一紙（一五・七

×二四・九）、第一二紙（一五・九×三七・六）、第一三紙（一五・九×一三・六）、第一四紙（一五・九×二二・七）、第一五紙（一五・八×二六・一）、第一六紙（一五・八×六・五）、第一七紙（一五・八×二七・三）、第一八紙（一五・八×三二・七）、第一九紙（一五・九×三八・四）、第二〇紙（一五・八×二七・五）、第二一紙（一五・九×二二・六）、第二二紙（一五・九×三九・二）

・各丁の折幅（単位は糎）――一四・三―一四・七

見返（一四・三）、一丁表（二四・五）・裏（二四・五）、二丁表（二四・五）・裏（二四・五）、三丁表（二四・四）・裏（二四・五）、四丁表（二四・四）・裏（二四・五）、五丁表（二四・五）・裏（二四・五）、六丁表（二四・五）・裏（二四・六）、七丁表（二四・六）・裏（二四・六）、八丁表（二四・六）・裏（二四・六）、九丁表（二四・六）・裏（二四・五）、一〇丁表（二四・五）・裏（二四・六）、一一丁表（二四・六）・裏（二四・六）、一二丁表（二四・七）・裏（二四・五）、一三丁表（二四・五）・裏（二四・五）、一四丁表（二四・五）・裏（二四・六）、一五丁表（二四・六）・裏（二四・五）、一六丁表（二四・五）・裏（二四・六）、一七丁表（二四・六）・裏（二四・六）、一八丁表（二四・六）・裏（二四・四）、一九丁表（二四・四）・裏（二四・五）、二〇丁表（二四・五）・裏（二四・五）、二一丁表（二四・五）・裏（二四・四）、二二丁表（二四・四）・裏（二四・四）、二三丁表（二四・四）・裏（二四・六）、二四丁表（二四・六）

・表紙

現在表紙となっているのは、本文を記した紙とは異なるやや光沢のある無地の料紙である。糊付けの跡が見られることより現在の表紙は、表紙裏打ちのための紙であると考えられる。中央上部に打付書きで外題が記され、右下に配架番号を記したラベルが張られており、左辺は表紙側に折り返されている。分量は一五・九糎×一四・四糎である。

・書名

外題として、表紙の中央上部に打付墨書（原か）で「行事秘」とある。内題は

無く、包紙には「清原宣賢御筆／宗源行事鈔 秘」とある。なお、本書の清書本と考えられる『宗源行事秘抄』（天理図書館一七六一―一）には、改装後の表紙に外題として、無地の題簽に「宗源行事秘抄 不出」とあり、一丁目表のような体裁をとる原装表紙の左肩に外題として打付墨書（清原宣賢筆）で「行事秘」とある。清書本の「行事秘」との記載が清原宣賢自筆であることから草稿本と見られる本稿で紹介する文献の書名も「行事秘」を採用した。

・本文

二二枚の料紙を右手前で継いでおり、全体にわたり裏打ちが施されている。見返より本文が記されており、墨付きは二二丁半で、白紙が一丁半（この白紙は第二二紙であり、他と異なりやや光沢のある紙質）である。界線は無く、漢字片仮名交りで記されている。全文は清原宣賢一筆で、宗源妙行次第の作法解説がなされており、末尾には本文の筆記と関わる文書が書写されている。草稿本のような体裁をなしており、各所に書入、墨滅、見消、朱書きが多数見られる。

・奥書―無し。

・蔵書印―印記「吉田文庫」（二丁表右下、朱陽長方単辺）

・保存

表面左肩に白無地題簽が貼られ、墨書で「行事秘」と記された紺色布張の丸帙に、「清原宣賢筆／宗源行事鈔 秘」と記された包紙に包まれ保存されている。

現在は折本であるが、上・中・下段にわたり一定間隔の連続した虫損が見られることより、かつて卷子本（継紙か）で保存されていたことがうかがえる。

## 解 題

本文献は吉田神道の行法の中でも特に重要視された宗源妙行の注釈書である。

宗源妙行は十八神道行事、神道大護摩行事と共に三壇行事とも称され、特に吉田

兼右以降は盛んに実修・伝授が行われた。天理大学附属天理図書館吉田文庫には、宗源妙行次第の吉田兼俱自筆本が遺されており、兼俱期の成立であることが知られている。

吉田兼俱の息子清原宣賢の筆で各次第に作法注釈を差挟んでおり、草稿本のような形態で、書込みや修正箇所が多く見られる。文末には本文の書写と関係すると考えられる文書の写しが記されており、これが吉田家で断絶した宗源妙行の相伝を修復するために、気多社社務の桜井俊基から兼右（清原宣賢を介して）になされた返し伝授に関わるものであることが先学によって論じられている。<sup>四</sup>しかしながら成立過程については意見が分かれており、いつどのような記録を元にして記されたものであるのか未だ決着を見ない。<sup>五</sup>

本書は判別が難しい部分も多く見られ、従来全文に亘る分析は行われていないままに成立過程が論じられてきた。しかしながら全文を通覧すると、朱書で「〇〇与<sup>か</sup>」「可<sup>たづぬ</sup>尋」などの不審を呈した記述やその不審に対する識者の回答などが見出され、単なる書物から書物への書写本ではないことが分かる。また、天理図書館では従来指摘されていなかった清書本『行事秘』〔宗源行事秘抄〕（天理図書館一七六一―一七二）の現存も確認され、『行事秘』の成立過程を論じる材料が揃いつつある。清書本『行事秘』には数多くの写本が存し、後の注釈書にも影響が見られる。加えて返し伝授の後に確立された宣賢系の宗源妙行次第は、以降長きに亘り吉田神道で踏襲され続けることになる。本書の全文に亘る検討は、こうした事相次第・事相注釈書の形成過程を明らかにするうえでも欠かせないものではないだろう。以下凡例を示した上で、草稿本としての体裁が読み取れるように書き込みや訂正部分を原本の記載に近づけて配置しつつ本書を紹介する。

## 注

- (一) 石崎正雄「唯神道大護摩次第について―吉田神道行法の成立と特質―」〔日本文化〕三八（昭和三十四年五月）
- (二) 出村勝明「吉田神道の基礎的研究」（臨川書店、平成九年）
- (三) 『神道大系』論説編九 卜部神道（下）（神道大系編纂会、平成三年）
- (四) 草稿本『行事秘』と返し伝授との関係を述べたものとして岡田芳幸「清原宣賢の研究」皇學館大学昭和五十一年度修士論文（国史学専攻）、西田長男「日本神道史研究」第五卷中世編下（講談社、昭和五十四年）三八二―三八五頁、鍋木紀彦「吉田家の道統断絶について―能登国一宮気多神社桜井俊基から吉田兼右への返し伝授を中心に―」〔神道宗教〕二二〇・二二一号（神道宗教学会、平成二十三年一月）がある。
- (五) 前掲注四所掲書に加えて、前掲出村勝明「吉田神道の基礎的研究」二六五頁の指摘がある。

## 【附記】

翻刻にあたっては、判読不明な箇所について松本丘先生に貴重なご教示を賜った。この場を借りて拜謝申し上げる。本稿の内容は、「吉田神道宗源妙行初段の作法考証―作法注釈書を手がかりとして―」〔第七回神道宗教学会学術大会（平成三十年十二月九日）於國學院大學〕、「宗源妙行事相注釈書の成立と受容―秘伝のテキスト化に注目して―」〔第七回神道宗教学会学術大会（令和元年十二月八日）於國學院大學〕と題して行った口頭発表の内容の一部を元にしてている。発表に際してご意見やご質問を頂いた皆様に深く感謝申し上げます。

なお、天理大学附属天理図書館の皆様にはご多忙の折資料閲覧の便宜を図っていただいた。末筆ながら厚く御礼申し上げます次第である。

『行事秘』の成立については、なお検討の余地がある。今後返し伝授に関連する資料や清書本との比較を含め、別稿を設けて論じたい。

（にった けいぞう・皇學館大学文学部助手）

# 凡 例

- ・末尾の二三丁裏に書写されている文書については読点を補ったが、前半部の次第注釈箇所については、句読点などは補わなかった。
- ・漢字の字体については、正字・略字・異体字が混用されているが、敢えて統一せず、底本の表記を可能な限り存した。
- ・誤字・脱字と判断されるものについては、変更を加えず、傍の括弧内にその旨を註した。
- ・括弧内は全て筆者の加筆である。
- ・底本で朱書となっている部分は、傍線を引き墨書との判別が出来るようにした。
- ・次第は、初段（第一・第二・第三）、中段（第一・第二・第三）、後段（第一・第二・第三）より構成されるが、各行事の上欄に「初一①」（初段第一の一つ目の行事）などとして番号を付した。
- ・各紙の継ぎ目は、下欄丸括弧（ ）内に紙番号を記した。
- ・各丁表・裏の境には、下欄山形括弧（∨）内に丁数を記した。
- ・「∴」は文字上に折目や継目があることを示し、「┌」は行間に折目や継目があることを示している。
- ・本稿の翻刻は、天理大学附属天理図書館本翻刻第一四〇八号である。

# 本 文

初一①

∴初段第一  
 ・先鳥居作法  
 拇指ヲ頭指ノマ中ノ節ニアテ、兩手ヲ  
 兩ノ脇ヘヤリテサケテコウノ方ヲ前ヘ  
 ナシテ  
 神ノマス鳥井ヲ入レハ—— 此文ヲ誦ス

初一②

・次進高座下  
 歩ヨリテ笏ヲ取テ一揖腰ヲカケサマ  
 前後加持 前朱雀後玄武トトナフ 揖前歇後歇

初一③

・次着座  
 陽日ニハ右ノ膝ヲカケテ次ニ左膝ヲカケ  
 陰日ニハ左ノ膝ヲカケテ次ニ右膝ヲカケ  
 坐揖  
 一揖 左右加持 左青竜 右白虎

∴〈見返〉

初一④

・次護身神法 五重  
 〓根本印 兩手ヲ合掌ノ如ク合テ中ヲ  
 フクラメテ 右母指ヲ上ニヲク 陰陽替坎  
 ヲノ□□コロシマ  
 〓八府印 左右ノ小指ト小指トヲ合シテ左  
 右ノ母指ト母指トヲ合ス 兩手ノ中三ツ  
 ヲヒロケテ  
 八イロノトノヲミタツ  
 〓日印 左ノ四ノ指ノマタノアハイヘ右ノ  
 手ヲサシ入テ母指ト母指トアハス  
 圓クナス  
 日

∴〈二丁表〉

〱月印

左右ノ手ノ甲ヲウシロサマニアハセテ

右手ヲ上ノ方ニナシテ小指ト母

指トノサキヲ合ス

月

〱九曜印

兩手ヲクミ合テ手ノハラヲ上ヘ

ナシ手ノ甲ヲ中ヘ成テ左右ノ小指

ヲ合テヲケハ九ツニナル

ホシ

初一⑤

・次太元仁岐神ヲ安陰日暨陽日横

陰日ニハ 右ノ岐神ヲ右手ニテトル 〱本カマヘ…(二丁裏)

陽日ニハ 左ノ岐神ヲ左手ニテトル 〱本ヲ右ヘナス

初一⑥

・次太麻於天二拜陰日ハ右ノヲトル陽日ハ左ノヲトル

座シナカラ二拜

〱仰時 アメノミハシラヲミタツ

〱ウツフク時 国ノミハシラヲミタツ

〱二拜ナラハ二度ナカラトナフ

初一⑦

・次三種加持

〱十宝印 兩手ヲクミアハセテニキル

右ノ母指ヲ上ヘ 陰陽替歌招請ニハカハル

タ、ハカハラス

無上灵宝神道加持

〱八握印

左右ノ無名指ハカリムスヒテ小指中

指母指ヲハ各合ス頭指ハカリハナス

頭指ニテ中指ヲオホフヤウニス

三元三行三妙加持

〱三光印

以我行神力 神道加持力

神變神通力 普供養而住

初一⑧

・次六根清淨加持

十宝印

神宣曰人波則□天下——

初一⑨

・次一氣元水加持

左手ニ三天ノ印ヲモテ岐神ヲトル小指ト

母指ニテ岐神ヲカ、フ

右手ニテ水器ヲトル左ノ伸タル三

ノユヒニ水器ヲカケテ

大元カク 水納オウ 元元クワシヨ 元初クワシヨ

左ノ岐神ニテ右ノ袖ヲ押テ

天ノ真名井乃清々潔ハシメキ元ノ水ヲ

降シ玉フ ト唱テ

水ヲ大元ニ入ル、也

水器ヲ本座ニカヘス

岐神ヲ大元ニカヘス

…(二丁表)

…(二丁裏)  
…(第二紙)

初一⑩

・次天地元加持

へ手ヲ十宝ノ印ノヤウニモチテ

古天地未割——然後神其中ニ

アレマス

岐神

へ次岐神ヲトル陰日右手陽日左手  
手甲ヲ上ニナシテトル

本欸

因テシヲコロロくニカキナシテ 卜唱テ

大元ノ水ヲ岐神ノ末ノ方ニテマハス

陽日左へマハス陰日ハ右へマハス

陽田小

十度□岐神ヲマハシテ大元ノ中ノ左ノ

方へ岐神ヲヲシツク次右次向次前

次中 へコレモ陰日ニハ右ヨリ始ム

肩マテ引アケ

へ引アクルトキ即ホコノサキヨリシタ、ルシホ

コリテ嶋トナル名テヲノコロシマト云二十小シ

ヲノ神カノ嶋ニアマクタリマシテハイロ

ノトノヲミタツ 岐神ヲ大元ノ中心ニタツ

へ岐神八タヒメクラス ソコヲツク

へ岐神ヲ引アクル時 大元ヲツくへク脱カ

へ天ノミハラヲミタツ 国ノミハシタヲミタツ

又ソコヲ岐神ニテツク 左ヲ上ノ方

岐神ヲ取ナラシテ兩手ニテ大元ノ

ハタヲウテ本座大元ノ上ニカヘス

手ノ甲ヲウへ

…〈三丁裏〉

初一⑪

・次鎮魂加持

へ左ノ小指ト右ノ無名指ト小指トヲ一所へ

アツメテ立テ、左右ノ母指ヲ其

前へスコシサケテ左ノ頭指中指無

名指ヲナラヘテ伸テ右ノ頭指中指

…〈第三紙〉

…〈四丁表〉

初一⑫

・次身曾貴加持

手七岐神ヲトル  
陰日右 陽日左

ヲ左ノ三ノ伸タル指ノ上ニツク  
へ神力神通神變妙壇 トトナフ

陰日ハ 陰神 六神ノ神号

陽日ハ 陽神 九神ノ神号

初一⑬

・次三元修眞加持

手ニ岐神ヲトル 陰右陽左

岐神ニテ惣ヲハラフ 陰日  
右へ陽日左 跡ノ

兩手ニテ岐神ヲモチテ太元ノ水ヲ

スクフテ太元ノ小タヲウツ 岐神末  
ニテ 三妙壇場 戒事欸

天元元トシテ清ク

又太元ノハタヲウテ

地本ヲ本トシテ寧ク

又太元ノハタヲウテ

人神ヲ神トシテ樂シ

大元ノハタヲウツへ岐神  
ヲカヘス

・次鎮魂加持

・次根本太諄辭

手七稜串ヲ取テ 本次第岐神トアリ如何  
稜串也

高天原七神留坐——

へ讀ハテ、五所ヲハラフ

大元 前 向 左 右

次ニ八宮ヲ一度ニマハシテハラフ

陰陽替ナシ

へ稜串 岐神ヲ安ス

・次三妙壇場結戒

…〈四丁裏〉

…〈五丁表〉

初一⑬

・次三妙壇場結戒  
上ノ事坎

初一⑭

・次齋場開元神宣 手<sub>七</sub>大麻<sub>於</sub>取  
日本取上神祇齋場——  
丁二 小大

┌(第四紙)

初一⑮

・次三元無上表白  
無上灵宝——

初一⑯

・次三元三行修真啓祝  
無上灵宝神道——

初一⑰

・次万宗拜札十八神道  
大元日神——

初一⑱

・次鎮魂加持  
〓初段第二

初二①

・先三種加持

初二②

・次日輪印

大元尊神法界——

初二③

・次神宣三妙啓祝  
妙哉是我天——

初二④

・次八宮鎮座岐神分配  
御宮四ツ、重テ  
アルヲ分配ス

岐神ニテ大元ノ水ヲ八タヒニツ宮へ入  
見次第 □ニハ左カラ入岐神<sub>上</sub>本<sub>上</sub>ヲ  
ナラヘラク御宮

前へ大元水分—— 左手ニワタネ

一宮鎮座 クナトヲ右手ヘワタシテ左手  
ニテ御宮ヲ一宮ニ安ス

…(五丁裏)

向へ太元水分

二宮——

左へ大元——

三——

右へ大元——

四宮——

へ大元——

六——

へ大元——

七——

へ大元——

八——

へ大元——

九宮——

・次鎮魂加持

〓初段第三

・先三種加持

・次瓊<sub>トギ</sub>矛印

右ノ母指ヲ左手ニテニキル左右ノ

残手ヲニキル 左ノ母指ト頭指トヲ

合テマロクスル也

掛<sub>モ</sub>畏<sub>キ</sub>八咫ノ圓壇——

・次十宝印 内縛

右ノ頭指ヲ上ニヲキテ内ヘニキル

左ノ母指ヲ上ヘナシテ

母指ヲ陽ニハ左ヲ上ニヲク陰ニハ右

ヲ上ニヲク

へ又岐神ヲ左手ヘトリテ  
水ヲ小□入御宮ニ入テ  
又岐神ヲ右手ヘワタシテ  
左手ニテ御宮ヲ二宮  
ニヲク  
次後同

…(六丁表)

…(第五紙) (六丁裏)

…(七丁表)



高天原——降臨此座

アハセタル母指ニテ招ク

招歇

天地海神降臨此座 招請也

拍手小大

初二④

・次鎮魂加持

中段 傳 〈端裏書〉

┌(第六紙)┐└(七丁裏)┘

∴中段第一

中一①

・先三種加持

・次六十四支ヲ取 陰右陽左

岐神ニテ袖ヲオサフ ヒモロキヲ陽日

ニハ左手ニテ取大指ノ方ヲ右ヘナシテ右手ヘ取

ワタシテ 又左手ヲ以テ上ヘナシテ兩

手ニテニキル 大元ノ横ニアル岐神

┌(八丁表)┐

陰小 不審 右キ 招歇  
ノ前ノ方ニテヒモロキノサキヲ水ニ  
ツケハ又岐神ノ向ノ方ニテヒモロキヲ  
水ニツケテ 天ノサキリノミコト  
大元 可尋 国ノサキリノミコト  
末ノサキリノミコト 国ノサキリノミコト  
水ニツケル時ノ文也

可尋

中一③

・次元水供養中ニテヒロキヲ打本ノ方ヲサキヘ

天水ウンソン三遍一ヘンノニヒモロキヲ  
ユルカス

中一④

・次四於左右乃指ニ挿

一ツニモチテ取ナヲシテ左ノ小指ノアハイ

挿時 ヨリ挿始テ母小指マテ挿テ又右ノ

末ヲ内歇 大指ヨリ母小指マテハサム 然シテ左右

外歇 ヒモロ 手ノ腹トウシヲ合ス 陽日ニハ右手

キノ 本ヲ ヲ上ニラク陰日ニハ左手ヲ上ニラク

手ノ向ヘハサム

中一⑤

・次十一神号ヲ九宮ニ勸請

十一神号トハ又神七代ノ神号也

木トナト 七地 惶 四澤 大戸チヤト 九天 面足大トナク ∴(第七紙)

豊 二天 太元 伊サナキ 国常 国狭 一水 一宮ヨリ

八風 スヒチニ 三雷 渥ニ 六山 面大トナク ∴(九丁表)

中一⑥

尋可

・次八八神籬ヲ八宮ニ圍繞 陰右陽左

手ヲ下ヘシテ ヒモロキヲ左マテクハル

目六宮目ヨリクハル

陽前ヨリクハル 左ヘメケル

火宮ヨリ

陰 向カラクハル 右ヘメケル

・次八府印

神祝々々

左ノ四ヲ右ヘ

掛毛畏幾

ウツシテハ陽ニハ

(モ腕カ) ヒロキノサキヲ左

末ヲ右ヘ陰ニハモト

次第 ヲ左

サキヲ右

中一⑧

・次忍手

・次鎮魂加持

每宮一拍之ト

・先三種加持

本次第二アリ

サキヲ右

中一①

・次柱鈴

於左右ニ取

陽日ニハ左手ノ鈴我腹ノ方右手ノ鈴

サキノ方

陰日ニハ右手ノ鈴我腹ノ方左手鈴

サキノ方

兩目ヲ塞テ腹ニアタルヤウニ

次ニサキノ方ノ鈴ヲ腹ノ方ヘナシ腹ノ方

ノ鈴ヲサキヘナシテ又五度フル此時ハ

右ノ片目ヲアク

柱鈴ヲラク時本座ニハヲカスシテヨセテ

ヲク 陽日ニハ左ノ星一ヲ右星二ノ

マ中ニアツ

中一③

・次交合

陰陽二一如本

コレハス、ヲヨセテラク事也

・次心本神宣

苗印

種苗印 左ノ小指ト無名指トヲ右手

ニテニキル 右ノ母指ト頭指トヲ合テ

マロクスル也 陰陽ニカハル

丹海觀

腹ヲフクラメテ三イキイキヲツク

苗印エテ

陽日ニハ アナウレシエヤウマシヲトコエ

アヒネ

陰日ニハ アナウレシエヤウマシヲトコエ

アヒネ

九宮ヲ一ヘンメケル

一宮エトツト

アヒネ

陰日小向ヨリ

陽日小前ヨリ

天地心柱陰陽一本 二反

イツノ次二唱フ

イツノ次二唱フ

…(一〇丁裏)

…(第八紙)

…(一〇丁裏)

中二⑤

・次三妙級長遍身通氣  
此□歌

八十枉津日神 右ハナイキシテ 神直日神 左ハナイキシテ

大直日神 級長戸辺命 級長津彦命

是風ノカミ也 口ヨリイキヲホツトシテ

アハシカシ時主ル風ミコウカノミタマ

此段不分明

…（二一丁表）

「（第九紙）

中二⑥

・次八卦分巡 陰右陽左

唱歌 種苗印

陽日ニハ アナウレシエヤウマシヲト中ニ

アヒヌ

陰日ニハ アナウレシエヤウマシヲト中ニ

アヒヌ

九宮ヲ一ヘンメタル陰日ハ向ヨリ始 陽日ハ

前ヨリ始 大元ヘハセス一宮ツ、ニテ

トナフ

中二⑦

・次神宣

掛毛幾伊弉諾尊

中二⑧

・次三大宮觀 苗印

三イキスル事欸

水宮張氣

風宮通氣

中二⑨

・次忍手三 本次第不見

鎮魂加持

…（二二丁表）

中三①

・先三種加持

次妙供

子手ヲツカシク柏印 左右ノ手一ツニ中指

マテアハセテ頭指ト母指トヲハ不合シテ

中ヲ大二ヒロケテウチヒライテ

八神ニ号

天地水火雷風山澤

万物元氣 拍手二 常ノ拍

日本國中 拍手二 手ニハカハル

唯一神座 拍手二

中三③

・次現供 手七米器於取

神祝々之

可尋 珍宝珠ヲ以テ八尋ノ殿ヲカサリタテマツル

中三④

・次雨宝神宣

●小手柏印ニテ上ニノス

右欸 左欸

陽米器ヲ左ニモツ 陰右ニモツ

大元 一宮 二 三 四 中 六 七 八 九 太

一粒八十八万増鏡マスカミカララフミツタマミ 雨宝童子

十宮コトニ唱欸 九宮コトニ

中三⑤

・次四海領掌 自凝印

根本印也 左大指上

印ヲ鼻ニアテ、

…（二三丁表）

「（第一〇紙）

「（二二丁裏）

東海神 南海神 西海神 北海神  
日 日 日 日 トトナフ 東海神南  
ニアテ、云心也

中三⑥

・次自擬印頂戴

印ヲヒタイニイタ、ク

右手ニテ一 二タキニ 三キヤテイ 四キヤキ  
ムネ 唵 陀 枳 尼 伽 底 誡 伽  
ヲウツ 左手ニテムネ 合掌 三光

五ネイエイソハカ  
寧曳莎哥  
天地和合印

天地和合印 右頭指ヲ左手ニニキル

左手母指ト頭指トヲ圓クアハス右

手ノ母指ト中指トヲ圓クアハス

へ此印ヲサシ上テ天ヲサシテ

唵タキニキヤテイキヤくネイエイソハカ

へ又印ヲ此印下ヲサシテ

唵

中三⑦

・次忍手二

中三⑧

・次鎮魂加持

…(一三四裏)

…(第一一紙)

後一①

・先三種加持

後一②

・次十寶印

神宝日出ト十宝印ニテ三度心ニ日ノ

良ニ出ニアテ、一ヘンへチトタカクアケテ日ノ東ニ

ノホルニアテ、一ヘン 日ノ巽ニ出ニアテ、一ヘン

一七波 — 二七 —

三 四

五 六

七 八

九 十

無上灵宝十界十住 —

後一③

・次手<sup>仁</sup>真澄ヲ取 左月 右日

先唱<sup>欵</sup> 取リヤウハ母指ト四指トニテトル

可<sup>尋</sup> 大元水上 — 妙偈コノ妙偈ハ眼精ノ事也

陰日ニハ柱鈴ノ上ニテアハス陰陽ニ替ナシ 眼精魂魄 —

へ太元ノ上ニマスミノ口ヲ合テ 岐神ニツクホト下ヘラシツケテ

へ一ツノマスミヲ脇ニラク陽日ニハ右陰日ニ左

後一④

・次振鈴 陰月 陽日 布瑠部由良由良止布瑠部

ツクホト ハルフユラくニニサト フルヘ 十度フル一度ツ、ニ

此文ヲトナフ一度ツ、ニテ一ツニト云テ数ヲシル

可<sup>尋</sup> へ左右鈴ヲ一処ニヨセテ 一ツニツニツ四ツ五ツ

此分 六ツ七ツ八ツ九ツ十ヲト唱テフル …(一五丁表)

…(一四丁裏)

又両鈴ノ下ヲ合テ眼精魂魄——トナフ  
胸ノ前ニテ鈴ヲアハス

後一⑤

・次神祝妙偈 上ノ文ノ事ナリ  
上ニアル事欸  
可 二鈴會面 下ノ四ヲ□小ネ□事也  
尋 二鈴ヲ玉盤ニカヘス事也

後一⑥

・鎮魂加持  
後段第二

後二①

後二②

・先三種加持  
・次十宝印 八大神呪  
可尋 陰天神呪 陽天神呪——  
内天神呪——

後二③

・次八府印  
マツ兩手ヲヒラキテ三種ノ大袂ノ一ツ  
一ツニテ母指ヨリ。一ツ、合テ又無名指  
ヨリ一ツくヒラキテ頭指マテヒタケハ  
八府印ニナル也  
陰行 利利利魂 利尊——  
陽行 見見魂魄 寒言——  
指ニク  
タテヲ

後二④

・次岐神行道 陰行右旋 陽行左旋  
岐神ニテ太元ノ水ヲ御宮ヘ入ル二度  
末ヲ 水□□  
少々欸 ツ、入御宮ノソコヲチクくトッ□□ニツ  
本欸 ツク 岐神ノサキヲ御宮ニ入末ヲ  
陽ハ 大元ニヨセカケテ 五大所成ノ印  
岐神ノ 二テ

「(第一二紙)

…(一五丁裏)

「(第一三紙)

へ天八下ムスヒノ尊 へ天三下ムスヒノ尊

…(一六丁表)

へアマアイノ尊 へアマ八百日魂尊

へ天八十万日魂尊 へシナカトヘノ尊

へ級長ツ彦ノ尊 風ノカミナリ

ウカノミタマノミコト へカクトナヘ

ハテサマニ印ヲ腹ノソハヘヲシ

ツク 忍手三

八宮ヲ一宮コトニカヤウニスル也

五大所成ノ印ハ手ヲ内ヘクミ合テ

左右ノ母指ヲサキヲイキアハスル也

「(第一四紙)

…(一六丁裏)

後一⑤

後二⑥

後二⑦

後二⑧

後三①

・鎮——  
・次四鈴婦座 本鈴ヨリカヘス  
一所ニヨセテラクヲ本ノ座ヘ返シテ置也  
・次三妙力三妙兩加持  
爪握印  
三光印ニテ 無上灵宝  
八握印ニテ 三灵三妙——  
可尋 祈願 祈ル事ヲ申ス  
・次鎮魂加持  
後段第三  
・先三種加持

…(一七丁表)

後三②

・次十宝印 三大神呪

吐普加身依身多女 五大神呪

利尊神言寒見陀魂 陰天小呪

寒言神尊利魂陀見

波羅伊玉意喜余目出玉

可尋

三十六反 三廻百八 数ヲナニ、テトルソ

三十六反ノ事

此数ヲトルヤウ御宮ヲ一ツくヲ心ニアツル也

可尋

陽日ニハ 前ノ御宮ヨリ左へ一遍クル

リトマハシテ柱鈴左右本鈴左右

トアテ、唱レハ十二遍ナリ

●

へニ番目ニハ向ノ御雷ヨリ始テ右へメクル

柱鈴左右本 鈴左右ト唱レハ

十二遍ナリ

○

三番目ハ又一番ノ如クスル也

十二遍也

已上三十六遍也 三度ナカラ大元へハ

セサル也

如此シテ坂木ヲ一葉取テ太元へ

入ル、也 へ坂木ヲ六ツ、三所ニラク也

○

二度メニハ向ノ火器ヨリ始テ

一番ハ右へ。二番ハ左へ。三番ハ右へ

作法上ノ如シ。柱鈴左右 本鈴左右

又坂木ヲ一葉大元ニ入

「(第一五紙)

「(第一六紙)

「(一七丁裏)

「(一八丁表)

○三度目

一番一宮ヨリ始ム二前ヨリ三番目

前ヨリ

又坂木ヲ大元ニ入 クナト前ノ方

已上八遍ニナル也

・次三光印 三力偈頌

・次八握印 三妙加持

・次同印 祈願 思フ事ヲイノル

可尋

鎮魂加持

・次下界垂跡神

下界勸請ニハ陽日ニハ陰ヲ行ス

陰日ニハ陽ヲ行ス

謹請 日本国中大小諸神

可尋

大元勸入 坂木入ル、

十宝印

・次三大神呪 三十六反 上ノ如クスル也

・次妙供 子手柏印 只一座三十六反スル也

可尋 八方精神徳号

万物元氣——拍手二

日本国中——拍手二

唯一神道——拍手二

唯一神道——拍手二

「(第一七紙)

「(一八丁裏)

「(一九丁表)

後三⑨

・次現供 手<sup>七</sup>米器<sup>於</sup>取 子手柏印ノ上ニスユ  
神祝々之

珍宝瑞珠ヲ以テ八尋殿ヲ奉飭

九宮<sup>七</sup>十一供

可尋

上下同シ手ニ米器ヲ取テ米ヲクハル

陽ニハ左<sup>上</sup>モツ陰ニハ右<sup>上</sup>モツ下号勸

陰ニス 陽ニス 所ハ如此

…（第一八紙）

大元 一 二 三 四 <sup>太元</sup> 六 七 八 九 大元二

へ天上天下海中一切諸神一切水神――

コレヲトナヘテ八宮ヘクハル一宮コトニトナフ

後三⑩

・次四海領掌 自凝印 根本印也

東南西北

自凝頂戴――

天授神呪如常 口傳

…（一九九丁裏）

上ノ中段ノ第三ニアルト同シ

印ヲ鼻ニアテ、東海神 南海神 西海

神 北海神 又東海ヨリ始テ日<sup>□</sup>ト

四タヒトナフ次ニ印ヲヒタイニアツ

右左手ニテ胸ヲ打テ

へ<sup>白</sup>末<sup>白</sup>地<sup>白</sup>和<sup>白</sup>舍<sup>白</sup>印<sup>白</sup>ヲイタ、キテ<sup>〇</sup>。唵

へ<sup>左</sup>右手ニテ胸ヲ打テ 陀<sup>タ</sup>枳<sup>キ</sup>尼<sup>ニ</sup> へ合掌ニテ

伽<sup>キ</sup>底<sup>テイ</sup> へ三光印ニテ誠<sup>誠</sup>伽<sup>伽</sup> へ天地和合印

ニテ寧<sup>寧</sup>曳<sup>曳</sup>莎<sup>莎</sup>哥<sup>哥</sup> へ此印ヲナシ上テ

天ヲサシテ唵―― へ又印ヲ下ヲサシテ

唵――

…（二〇〇丁表）

後三⑪

・次鎮魂加持 神力神通神変妙壇

眼精ノ文ヲトナフルナリ

後三⑫

・次後鈴 合スル文如上眼セフ坎 <sup>陰陽ニヨラス柱</sup>  
柱鈴ノ上ニテ鈴ヲ合ス下界勸請トハ <sup>レイノ上ニテアハス</sup>

可尋

陽ニハ陰行陰日ニハ陽行也今<sup>□□□□</sup>

レイヲ左ヲワキニヲキ右ヲ坎フル也

振ヤウ前ノ如シ但文カハレリ

一ヲハ一ツトイヒニヲハ二ツトイヒ三ヲハ三ツト

イヒ四ツヲハ四ツトイヒ五ヲハ五ツトイヒ

六ヲハ六トイヒ七ヲハ七トイヒ八ヲハ八トイヒ

九ヲハ九ツトイヒ十ヲハ十ト<sup>ト</sup>ス

又ニヲナラヘテフル文ナシ数不定チト

<sup>ムネ</sup>又<sup>胸ノ前ニテアハス</sup>鈴ヲ合スル眼精―― トナフ

二鈴本座 丁<sup>□</sup> 可尋此方ニナシ 丁アリ

後三⑬

・次八府印

八神尊号 丁

八府印マツヒロケテライテ一ツ、アハス上ノ

如シ

神皇魂尊 母指ヲアハス

高皇魂尊 頭指ヲアハス

イ<sup>タ</sup>ク<sup>マ</sup>玉<sup>ム</sup>ス<sup>ヒ</sup>ノ<sup>命</sup> 中指ヲアハス

タル玉魂命 無名指ヲアハス

タル玉魂命 小指ヲアハス

ヲホミヤノヘノ神 無<sup>名</sup>指ヒラク

ミケツノ神 中指ヒラク

…（二〇〇丁裏）

…（第一九紙）

事代主神 頭指ヒラク

…〈二二丁裏〉

丁

後三(14)

・次諸源拜礼 手ヲニキリテ

人元妙神力加持

奉正直拜——

地元妙神通加持

奉正直讀——

天元妙神變加持

奉正直觀——

天地陰陽内天外天——

無上灵宝神道加持 丁

後三(15)

・次十宝印 内縛 二空 右母指ヲ上ニヲク

發遣 明言

天アマノヤミ地ツチ海神一切諸神奉ル送レニモツ

本宮モトツミ一 二ヘントナフタヒコトニ手ヲ母指上ヘ

ヲユルカス送心也

拍手 大小

後三(16)

・次護身神法 丁

後三(17)

・次二拜 大麻欵 笏欵 太麻ナリ

後三(18)

・次座揖 左右加持 笏ヲトル

陽ハ右ノヒサヨリ退 陰ハ左ヒサヨリ退

後三(19)

・次立揖 前後加持

後三(20)

・次退下

「(第二〇紙)  
「〈二二丁表〉

「〈二三丁表〉

宗源唯一神道ノ行事今度吉田斷絶候  
間、傳授之儀侍從兼右懇望申処、御  
傳授本望候、然上者於向後聊不可存  
等閑候、恐々謹言

享祿三

七月廿一日

宗尤〔清原宣賢〕〔花押〕

氣多社社務

彈正〔松井俊基〕大弼殿

日本紀奧書所望候間、如此書遣了

此本吉田〔吉田兼俱〕二品奧書分明也、最可謂証本

深藏函底輒莫許他見矣

享祿三年七月廿一日 環翠軒宗尤〔清原宣賢〕〔印影〕

「〈二三丁裏〉

「(第二一紙)